

医心 伝心

地震と原子力発電所

富山県医師会監事 狩野 俊哉

ゴールデンウィークの5月5日午後、珠洲市を震源とした震度6強の地震があり、その揺れに驚いた方も多いのではないのでしょうか。その後、日本各地で相次いで発生した地震は、メカニズムは異なりますが、あたかも連動しているかのようです。遠い記憶になりましたが、2007年3月25日、輪島沖を震源とするM6.9の地震が発生し、県内も広い範囲に被害が及び、広域災害に指定されました。2011年には東日本大震災が発生し、津波による街の壊滅的被害と福島第一原発の破壊による地域環境汚染がおこり、長引く後遺症のように今も住民を苦しめています。このとき議論になったのは「想定外」という言葉でした。何メートルの津波を想定して防波堤を築いたのか、どのように保安基準を設定したのか、指揮命令系統は機能したのか、確かな検証が必要ということでした。

富山県に最も近い原子力発電所は石川県の志賀原発であり、氷見市の北半分はUPZ (Urgent Protective Action Zone: 原発から5~30km) に含まれています。因みに原発から5km以内の区域はPAZ (Precautionary Action Zone) となっています。UPZにかかる氷見市では、国、石川県、富山県、他の自治体、関係団体が共同で防災訓練を行っており、年々規模が大きくなっています。2022年度には、1700人が参加し、七尾市の住民が富山県側に避難する訓練も行われました。氷見市医師会の役割は、避難住民に安定ヨウ素剤服用の理由を説明することと、ヨウ素過敏や持病を持つ患者さんへの個別対応です。訓練では静かですが、混乱した災害現場での説明は簡単なことではないと思います。一般に、放射線の外部被曝について

はイメージしやすいようですが、内部被曝については理解しにくいところであり、わかりやすい言葉での説明が求められます。

人間だれしも災害を目にすると、危機意識を持ち、なにか備えなければと考えます。しかし時間とともに意識は遠ざかり、ガードが下がってしまいがちです。あの東日本大震災のショッキングな映像でさえ、忘れることこそありませんが、時間とともに脳裏から薄れようとしています。問題は如何にして危機に対する意識を高く保つかです。ひとつは訓練に参加することですが、誰しもが参加できるわけではありません。そこでおすすめするのが、「富山県公式チャンネル」(YouTube)です。過去4年間の訓練の様子を臨場感あるドキュメントとして見ることができます。更に「富山県環境放射線データ」には県内のモニタリングポストの放射線データがリアルタイム表示されています。因みに現在の氷見市は0.059 $\mu\text{Gy/h}$ 、富山市は0.075 $\mu\text{Gy/h}$ となっていて、見えない環境放射線を可視化して、意識するひとつの方法です。

日本のエネルギー自給率は11.2% (2020年度) にすぎず、現在輸入しているエネルギー資源を失うことになれば、国としての機能が維持できないことになります。エネルギーミックスとして電力を確保するとなれば、効率的な原子力発電も残す覚悟が必要です。しかし、地震に代表される地殻変動がコントロールできない以上、どんなに危険を予測しても「想定外」が付きまといまいます。そのような観点から、私たちは近くに原発があるのだという意識は常に持ち続け、備えなければなりません。